様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３２６８５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2010～2013
課題番号：２２７２０２１９

研究課題名（和文）語学留学生の社会関係資本としての目標言語使用機会の獲得に関する研究

研究課題名（英文）Trans-bordering cultural capital: International students' acquisition of TL-mediated socializing opportunities

研究代表者
深田　芳史（Yoshifumi, Fukada）

明星大学・人文学部・教授

研究者番号：６０３５０２７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　1,800,000円、（間接経費）　540,000円

研究成果の概要（和文）：本研究ではいくつかの研究に分けられるが、その内の一つとして、数名の留学生／ESL話者を研究対象とし、それぞれが、どのようにして現地の英語母語話者と目標言語使用機会を獲得し、また、目標言語を介して現地の人々と交流を深めているのかを調べる為、長期的にインタビュー、参与観察を行なった。その結果、彼らは、自身の技能／知識が文化資産として認められる親和空間においてはactive social agentとして目標言語を介した社会的やりとりに積極的に参加できていることを明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：The number of international students studying in English-speaking countries continues to increase globally / world-wide. However, many studies reveal that such opportunities are not automatically given even if learners are living in the host country. I investigated how international students living in the U.S. acquire opportunities of target language (TL)-mediated socialization with local students / people in naturalistic contexts. I longitudinally collected qualitative data from several international students / ESL speakers by informal interview and participatory observation. The main results show that the international students analyzed in this study secured opportunities of TL-mediated socialization with local students / people in different types of social space called affinity space where their various skills / knowledge is validated as trans-bordering cultural capital.

研究分野：外国語

科研費の分科・細目：英語教育

キーワード：留学生　社会的ネットワーク　文化資産　親和空間

１．研究開始当初の背景

英語圏の国々で学ぶ留学生の数は、世界レベルで見ると増加傾向にある。2012 年には、カナダでは 214,955 人、オーストラリアでは 245,531 人、英国では 488,380 人、そして、アメリカ合衆国において 819,644 人もの留学生が学んでいたことが報告されている（Institute of International Education, 2013）。日本人留学者数は、経済の停滞や家計の悪化、交換留学時期と就職活動の重複、留学費用の高騰、日本人学生の内向き思考、そして、数十年間変化しない日本の大学の留学プログラムなど複合的要素が原因(小林、2011）となって 2004 年をピークに減少しているものの、日本政府も日本人学生の海外交流推進に力を入れている（文部科学省、http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/25/02/1330698.htm、2014 年 3 月 16 日）。

英語圏の国々に留学する理由は様々であろうが、その中でも、英語環境に身を置き、日常生活の様々な場面において実際に英語を使うことで自身の英語力を上げたいというのも主な理由の一つとして挙げられるであろう。留学生のこうした期待は、何事もまず、参加することで学びが得られる（Bateson, 1994）ことを鑑みると道理に叶った期待と言える。しかし、問題となるのは、留学生たちが実際どの程度、留学先での日常生活において英語を使う機会が得られているのかという点である。

留学すれば目標言語が自然に話せるようになるというわけではなく（Kinginger, 2009, p.114)、過去の研究でも、例え留学しても目標言語を介した交流の機会を持つのは容易ではないことが明らかにされている。例えば Ayano (2006)は、イギリスに留学した日本人留学生が、英語でコミュニケーションすることに対するストレス、疎外感、また、他の日本人留学生と長時間行動を共にすることが地元学生との交流を妨げた事例を報告している。Jackson (2006)は、五週間のイギリス短期留学プログラムに参加する、英語専攻の香港人大学生に焦点を当て研究を行なったが、コミュニケーションスタイルの違いや好まれる会話トピック、そして、ユーモアセンスの違いが原因で地元学生そして他国からの留学生たちとうまく社会的関係を築けなかったことを結果として示している。また、Pearson-Evans (2006) は、日本に留学するアイルランド人留学生に焦点を当てて研究を行ない、彼／彼女らが(1)アイルランドで暮らすアイルランド人、(2)日本で暮らすアイルランド人、(3)日本で暮らす外国人、(4)日本で暮らす日本人の四種類のソーシャルネットワークを築き、日本で暮らす外国人とのネットワークは、精神的サポート、日本に関わる情報リソースにはなるが、現地の日本人とのネットワーク構築の妨げにもなったことを明らかにしている。さらに Ming-Hung Lam (2006)は、香港の大学で学ぶ中国本土出身学生を対象に調査を行ない、現地大学生や現地で学ぶ海外留学生との間に存在する異なる世界観、価値観、人生目標、選好する会話トピック、そして、異なる社会経済・学術レベルが、彼らとの異文化間コミュニケーションを困難なものにしたと述べている。同様に、香港で学ぶ中国本土出身の学生に焦点を当て研究を行なった Gao(2010)は、中国本土の学生は、自身の知識、スキル、アイディアが香港人学生に資産、リソースとして認められない場合、香港の地元学生との交流が困難になると結論付けている。

２．研究の目的

このように過去の研究を見ると、留学生たちが地元民との目標言語を介した社会的交流機会を獲得することがいかに困難なものであるかが分かる。そこで私は、「留学生は、留学先でいかにして目標言語を介した社会的実践／やりとりの機会を獲得することが

できているのか」をリサーチ・クエスチョンとし、本研究を行なうことにした。留学生の目標言語を介した社会的やりとりの機会は、その言語を母語として話す地元民だけでなく、他国からの留学生でその目標言語を流暢に話す人々との関係の中でも獲得ができていることが最初の２年間、アメリカ、ロスアンジェルスのESLプログラムで行なったアンケート、インタビュー調査で明らかになったが、三年目にハワイに一年間滞在した際に行なった研究では、英語圏に留学する学生の、地元の英語母語話者との関係における英語使用機会獲得に焦点を当て本研究を続けることにした。なぜなら、先述のPearson-Evans (2006)も示すように、留学生にとって地元民との社会的関係の構築、そして、彼らとの英語を介した社会的実践／やりとりは、同国、他国からの留学生とのものよりもより困難であると同時に、多くの留学生が熱望するものでもあるからだ。

３．研究の方法

本研究を実施した四年間(2010-2013)の内、最初の二年間(2010,2011)はアメリカ、ロスアンジェルでデータ収集を行なったが、Mixed methodアプローチを採用しアンケートとインタビューによって大学のESL学生そして大学の学部生から関連データを収集した。そして、データ収集を行なう最後の年となる三年目（2012）は、私が特別研究員としてハワイ（オアフ島、ワイキキ）に一年間（2012年4月9日–2013年3月31日）滞在しながらデータ収集を行なった。この年度の研究では、留学生たちの日常生活に存在する様々な社会的空間内における地元の英語母語話者との力関係、そして、それに伴い変化する留学生の社会的実践／やりとりへの参加度合の変化を捉える為、クリティカルエスノグラフィー(Davis 編, 2011; McCarty 編, 2011)を採用した。これは、研究対象者たちに関わる様々な事象、殊に、彼らの力関係をクリティカルな視点で分析する民族学誌的研究メソドロジーである。本研究は、研究対象者となる留学生たちの、留学先における各社会的空間内での英語母語話者との力関係が、英語を介した社会的実践／やりとりへの関わりにどのような影響を及ぼしているのかを捉えていくことを目指しており、その点でこの研究メソドロジーが本研究には最も適したものであると私は判断した。

４．研究成果

最初の二年間で行なったアンケート・インタビュー調査では、留学生の多くにとっての英語（目標言語）使用機会は、現地の英語母語話者だけでなく、他の留学生などの非英語母語話者との関係の中で獲得できていることが明らかとなった。留学生同士の関係は、Safe houseとして機能し、安心感と自信の両方を持ちながら英語のやりとりに参加できることが分かった。こうした点が明らかとなり、私は、自身が関わっている英語教育プロジェクト、明星サマースクールプロジェクトで明星大学生と海外からやってきた非英語母語話者とのやりとりとその効果に焦点を当て論文（Fukada, 2011, 2012）を執筆した。

三年目にハワイで行なった研究では、留学生の英語母語話者との社会的関係の構築、彼・彼女達との関係の中で生まれる英語使用機会の獲得に焦点を当ててデータ収集を行なったが、先述の非英語母語話者同士の英語のやりとり同様、共通の趣味・関心によって結ばれる人々が社会的実践によって構築する親和空間(affinity space)と呼ばれる空間においては、目標言語であってもより主体的、積極的にやりとりに参加できることが分かった。

例えば、研究対象者の一人である日本人留学生明子の場合は、コロラドで二年間暮らしながらも友人を一人も得ることができなかったが、編入学したハワイの大学では、民族的背景やこれまでの経験、性別、年齢などは

関係なく、互いの国／文化／言語に対する共通の興味・関心、そして、それに関わる社会的実践によって繋がることができる親和空間を International Student Assosication（ISA）の地元民／アメリカ人学生メンバー、そして、自身がプライベートの日本語チューターを務めるアメリカ人女子学生との人間関係の中で構築することができていた。明子がそうした地元民／アメリカ人学生たちと構築した親和空間をコミュニティーとして見なせるかを定義付けすることは難しいが、明子は確かにその社会的空間内で地元民／アメリカ人学生たちと共通の興味・関心、目的によって心理的なつながりを持つことができると同時に、安心感を持って目標言語を介した社会的実践／やりとりに参加することができていた。また、そうした社会的空間においては、自身が文化資産を有する人的リソースまたは社会的資産であるという意識、アイデンティティーを持ちながら、他の社会的空間よりもより主体的に地元／アメリカ人学生と関わり合うことができたのである。この結果は、フロイト、ユングと並び心理学の三大巨頭と評されるアルフレッド・アドラーの、人が共同体に所属しているという主観的感覚が持つことができたり、他者と積極的に関わり合う勇気を持てるのは、他者に貢献できていることを実感し、自分自身に価値を見出せた時であるという主張（岸見と古賀より,2013）と一致する。

それぞれの親和空間において、明子が英語を介した社会的実践／やりとりにおいて主体的に行動できたのは、明子自身の努力／働きかけもそうだが、その親和空間内にいる地元民／アメリカ人学生が共有するキャピタル D (=Discourse) (Gee, 2004)に基づく、彼・彼女たちの振る舞い方、やり取りの仕方、価値観によるところも大きい。例えば、明子が ISA で経験した、地元民／アメリカ人学生と英語でやりとりする最中、「言葉に詰まっても発言権を奪わず待ってくれる」、「間違った表現を使っても意図することが明確であればやり過ごす（let it pass)」(Firth, 2009) という振る舞い／やり取りの仕方、また、明子が日本語チューターを務めるアメリカ人女子学生が、明子に積極的に話しかけ、日本語チューターを依頼してきた行動に反映される、「明子を含む留学生の母語／文化的背景を学ぶに値するものと見なす価値観」がそれぞれの社会的空間でごく自然なものとして共有されていたことによって明子の主体性もその社会的空間内では強化されたのだと言える。　明子は其々の親和空間において、英語能力が主に問われる社会的実践／やりとりでは新参者の立場で他の、または、もう一方の地元／アメリカ人メンバーのサポートを受けるも、明子が持つ日本または日本文化に関する知識、そして、日本語に関わるスキルや知識が問われる社会的実践／やりとりには古参者的立場で他をサポートしながらより主体的／中心的に参加できた。このことはつまり、明子は親和空間へ関わり始めた期間のみを鑑みると新参者という立場に固定化されるが、参加する社会的実践／やりとりによっては流動的かつダイナミックに古参者にもなりうることを意味する。

Gao(2010)は、香港の英語を介して授業が行なわれる大学で学ぶ、中国本土出身学生の英語使用機会獲得について研究を行ない、中国本土出身学生の持つ知識／スキルは資産として必ずしも価値あるものとして見なされなかったと結論付けているが(p.288)、地元民／アメリカ人学生との社会的実践／相互的やりとりを社会的空間の概念的枠組みの中で分析すると、留学生たちが持つスキル／知識は、偶然にある時は資産と見なされたり、見なされなかったりするわけではないことが分かる。留学生が各社会的空間の中で、どのような経験や背景を有した地元民／アメリカ人学生と、どのような社会的実践に関

わり、また、どのような話題やテーマについて相互的やりとりを行なっているのかを考慮することによって、どのような状況で留学生の有する知識／スキルが文化資産となり、また、彼／彼女達が社会的資産となりうるのかを推測することが可能となる。地元民／地元学生が持つ背景／経験は多様であり、どのようなスキル／知識に価値が置かれるのかも様々である。つまり、留学生のスキル／知識は、留学先のすべての状況で固定的に文化資産として位置づけられることはないのだ。

明子だけでなく、この度の研究で確認されたその他の事例においても、研究対象者たちの様々なスキル／知識（韓国伝統楽器のスキル／韓国伝統音楽の知識；波打ち際で行なうスポーツ、スキムボードのスキル、また、所有するスキムボードそのもの）が文化資産として見なされる親和空間では、地元学生／地元民との目標言語を介した関係の中でも留学生／ESL 話者たちがより積極的な社会的主体となり得ている様子を捉えることができた。本研究で私は、明子、そして、その他の研究対象者のこうした様々なスキル／知識を単に文化資産と呼ぶのではなく、越境する文化資産（Trans-bordering cultural capital）と位置付けることにした。なぜなら、各研究対象者の様々なスキル／知識は、各々が見つけた親和空間内で国境や異なる民族的背景、そして、性別、年齢など、様々な境界を超えて地元民／地元学生とつながれる文化資産に成りうることを確認できたからである。ハワイで行なわれた研究で明かになったこうした点は一本の論文を執筆し、JACET ジャーナルに投稿している（現在審査中）。そして、さらにもう一方の論文を現在執筆中である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　２　件）

1. Yoshifumi Fukada, Generating agentive TL interaction in TBL projects, *The Language Teacher Vol. 36, No. 5,* 査読あり 2012, October, pp.3-4.（Best paper として掲載）

2. Yoshifumi Fukada, Generating agentive TL interaction in TBL projects, *JALT2011 Conference Proceedings,* 査読あり, 2012, pp.316-327.　（Best paper 受賞）

〔学会発表〕（計　10　件）

1. Yoshifumi Fukada, An ESL speaker's TL-mediated socialization in the Skimboarding affinity space, SLAT Roundtable 2014, Tucson, Arizona, February 2014. (The First Prize 受賞)

2. Yoshifumi Fukada, International students' agentive TL-mediated socialization in their affinity space, SLAT Roundtable 2014, Tucson, Arizona, March 2014.

3. Yoshifumi Fukada, International students' trans-bordering cultural capital: A critical ethnography, ICLC2013: The fifth International Conference on Language and Communication, Bangkok, Thailand, December 2013.

4. Yoshifumi Fukada, International students' dynamic engagement in TL-mediated social interactions in social space: A critical ethnography, ACE 2013; Annual National Conference, Osaka, October 2013.

5. Yoshifumi Fukada, International students' struggle and success for securing TL-using social networks within the host country, AAAL 2013; Annual National Conference, Dallas, March 2013.

6. Yoshifumi Fukada, International students' agentive TL-mediated socialization with trans-bordering cultural capital, Hawai'i TESOL Conference 2013, Hiro, Hawaii, January 2013.
Yoshifumi Fukada, Generating agentive TL interaction in TBL Projects: A Five-year fieldwork, JALT International Conference, Tokyo, Japan, November 2011.

7. Yoshifumi Fukada, Perceptions of Japanese undergraduates towards English: The impact of English social interactions in the ELF environment, ELF4 International Conference, Hong Kong, China, May 2011.

8. Yoshifumi Fukada, Sustaining factors of active TL interactions in task-based learning, ICAL2010 International Conference, Taiwan, China, November 2010.

9. Yoshifumi Fukada, Impact of authentic social interactions with speakers of different English varieties on EFL students' attitudes toward

10. Yoshifumi Fukada, World Englishes: Fieldwork in a task-based project at a Japanese university, LIA2010 International Conference, Indonesia, Bali, April 2010.

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
深田　芳史（FUKADA, Yoshifumi）
明星大学・人文学部国際コミュニケーション学科・教授
研究者番号：60350279

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：